

種 名 エゴノキ  
万葉時代の呼名 ちさ・山ぢさ



詠人 作者未詳

万葉集卷七 一三六〇

気の緒に思へるわれを山ぢさの  
花にか君が移ろひぬらむ

### 【現代訳】

わたしの命というほどに思っているのに山ぢさの花のようにあなたは心を移してしまったのかしら…

### 【エゴノキの解説】 エゴノキ科の落葉小高木

高さは10mほどになる。樹皮は赤褐色できめが細かい。葉は両端のとがった楕円形で互生。花期は5月頃、横枝から出た小枝の先端に房状に白い花を下向きに多数つけ、芳香がある。品種により淡紅色の花をつける。果実は長さ2cmほどの楕円形で、大きい種子を1個含む。熟すと果皮は不規則に破れて種子が露出する。

庭木などとして栽培もするほか、緻密で粘り気のある材を将棋のこまなどの素材とする。果皮に有毒なサポニンを多く含んでいるので、昔は若い果実を石鹼と同じように洗浄剤として洗濯などに用いた。新梢にはしばしば菊花状の構造が認められるが、これはエゴノネコアシと呼ばれる虫こぶである。